メッセージアウトライン
出エジプト記7:1~25
「エジプトへのさばきの始まり」

＜5～6章要約＞

主はモーセをイスラエルの民をエジプトから脱出させる指導者として立てられた。そして彼の助けとして兄のアロンも召された。モーセとアロンはエジプトに戻り、エジプトの王ファラオのところへ行き、イスラエルの神、主の命令のゆえにイスラエルの民をエジプトから出国させるように願った。これを聞いたファラオは彼らの願いを聞き入れるどころか、主をあざけり、かえって報いとしてイスラエルの民にもっと厳しい労役を課した。それゆえモーセとアロンはイスラエル人からも反発され意気消沈してしまった。モーセは民を説得するが、民は落胆と厳しい労役のゆえに聞き入れない。

主は再びモーセにファラオのもとに行くように告げるが、モーセは自分の口べたを理由にこれを辞退しようとする。彼は全く自分の無力さを思い、弱気になっていた。しかし、これから主なる神が全面的にその働きを開始されるのである。もうだめだと思った時こそ神の御力が現わされる時なのである。

[1-2]「主はモーセに言われた『見よ、わたしはあなたをファラオにとって神とする。あなたの兄アロンがあなたの預言者となる。あなたはわたしの命じることを、ことごとく告げなければならない。あなたの兄アロンはファラオに、イスラエルの子らをその地から去らせるようにと告げなければならない。』」

当時のエジプトではファラオはエジプトの預言者が神々の名において語るのを聞く習慣があった。それで主はモーセに預言者を通して語る神々の一人としてファラオの前に出るように言われたと考えられる。そしてモーセは自分が口べたであることを強く自覚していたので、主は彼の兄アロンをファラオに対して預言者として用いられるのである。神がモーセに告げられたことを、モーセはアロンに告げ、アロンはそれをファラオに告げる。そしてそのメッセージこそイスラエル人をエジプトから去らせるようにというものであった。

[3-5]「わたしはファラオの心を頑なにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で数多く行う。しかし、ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。そこで、わたしはエジプトに手を下し、大いなるさばきによって、わたしの軍団、わたしの民イスラエルの子らを彼らの中から導き出すとき、エジプトは、わたしが主であることを知る」

イスラエルをエジプトから去らせることはファラオがあっさりと認めることではない。モーセはすでに5章でファラオの厳しい拒絶にあっている。それはここでも言われているように、主がファラオの心を頑なにし、それによって主が「しるしと不思議、大いなるさばき」をエジプトで行われるためであった。そして、そのことによってエジプトは

イスラエルの主なる神こそ真の神であることを徹底的に知らされ、恐れと驚きのうちにイスラエルの民をエジプトから出国させるようになる。これが主のご計画であった。
[6-7] ファラオは巨大な絶壁のように彼らの行く手をさえぎっている。そしてイスラエルの民はモーセとアロンに従おうとしない。しかしこのような逆風の中で、人間的に見れば何の望みも可能性もない中で、彼らは主のことばを信じ、もう一度立ち上がったのであった。この時モーセは八十歳、兄のアロンは八十三歳。もう働き盛りの時はとっくに過ぎている。しかし主はそのような彼らを用いられ、御栄光を現されるのである。信仰者には引退も定年もない。神の召しがあり、その召しに従っていくところにすばらしい道が開けて行くのである。
[8-10]「また主はモーセとアロンに言われた。「ファラオがあなたがたに『おまえたちの不思議を行え』と言ったら、あなたはアロンに『その杖を取って、ファラオの前に投げよ』と言え。それは蛇になる。」モーセとアロンはファラオのところに行き、主が命じられたとおりに行った。アロンは自分の杖をファラオの家臣たちの前に投げた。すると、それは蛇になった」
　モーセとアロンは再びファラオの前に立った。周りには武器を持った多くの家来たちが控えていたであろう。ここでファラオが求めるのは、彼らが主なる神から遣わされているという証拠であろう。詳しい会話は書かれていないが、確かに9節に記されているような質問をファラオはしたのであろう。それでアロンが彼の杖をファラオとその家臣たちの前に投げた時、それは主のことばのとおり蛇になったのであった。エジプトでは蛇は神々の化身のひとつと考えられていた。それゆえ、これは主こそ力ある神、不思議を行われる神であることを示すものであった。
[11]「そこで、ファラオも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらエジプトの呪法師たちもまた、彼らの秘術を使って同じことをした」
　彼らも自分の杖を投げるとそれが蛇になった。これに対してはいろいろな解釈がある。
①一種の催眠術を使って見ている者を惑わせた。
②手品、トリックを用いてあたかも杖が蛇に変わったかのように見せかけた。
③杖はもともと蛇であった。コブラはえり首の筋肉にある種の圧力をかけると硬直して動かなくなるという。そしてそれはまた、同じ方法で戻すことができた。このことを利用して杖と見せかけた蛇を地に投げた。
④悪霊の超自然的な力を利用して実際に奇跡を行った。
　しかし、問題は悪霊に本当にそのような力があるのかどうか。仮にそのような力があったとしても、悪霊といえども神の許しがなければ活動することができないので、神の力が現わされているこの時にそんなことができたかどうかは、はなはだ疑問である。

それで一番妥当な解釈は何らかの手品、トリックを用いて蛇が杖に変わったように見せかけたということではないかと思われる。
[12] しかし、アロンの杖は彼らの杖を呑み込んでしまった。トリックであろうが悪霊の力であろうが、真の神の力の前には何の役にもたたないのである。
[13]「それでもファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が言われたとおりであった」
杖が蛇に変わるという出来事はファラオにもエジプトにも実害はなかったかもしれない。しかし、これは言わば小手調べであり、いよいよここから主なる神がエジプトを打たれる十の災害が始まっていく。ファラオが心を頑なにすることを繰り返せば繰り返すほど、その災害が進んでいく。主はそのようにして長い間イスラエル民族を苦しめていたエジプトに対してさばきをなさるのである。そしてその第一の災害が始まっていく。
[14-18]「…見よ、彼は水辺に出て来る。…」(14~15) たぶんファラオは何かの宗教的儀式または礼拝のためにナイル川の岸辺にやって来るのであろう。ナイル川こそエジプトに豊かさをもたらしている源泉であるので、そのナイル川に対してファラオが何らかの宗教的儀式をするということは当然ありうることであり、実際歴史を調べてみるとそのようなことが行われていたことが分かっている。
日本でも豊作をもたらす山の神や海の神等に対して祭りをするということは昔から行われている。
宗教的儀式を行いにやって来るファラオに対して主はモーセを通してさばきを宣言される。(17~ 18) これはもう対話ではなくさばきの宣言である。ファラオの頑なさ、強情がこのさばきを招いたのである。そしてその目的はイスラエル人の神こそ真の力ある神、主であることをファラオが知るようになるためであった。そのさばきとは、モーセが手に持っている杖でナイル川の水を打つとその水は血に変わって、魚は死に、川は臭くなり、エジプト人はその水をもう飲むことができなくなるというものであった。
[19]主はモーセに言われた。「アロンに言え。『あなたの杖を取り、手をエジプトの水の上、その川、水路、池、すべての貯水池の上に伸ばしなさい。そうすれば、それらは血となり、エジプト全土で木の器や石の器にも血があるようになる。』」
その範囲はナイル川だけでなくすべての支流や水路、池までもその対象であり、また木の器や石の器にも血があるということは、それらの中にあった水が血に変わるということであった。
[20-21]「モーセとアロンは主が命じられたとおりに行った。モーセはファラオとその家臣たちの目の前で杖をあげ、ナイル川の水を打った。すると、ナイル川の水はすべて血に変わった。ナイル川の魚は死に、ナイル川は臭くなり、エジプト人はナイル川の水を飲めなくなった。エジプト全土にわたって血があった」

これは大変な災害であった。魚は死んで食べられなくなり、水も飲むことができなくなった。これは生死にかかわる大問題である。この出来事は主がエジプトの繁栄の源を打たれたということである。

さて、この血とは本当に人間あるいは動物の血なのだろうか。どうもそうではないようである。ヨエル書2:31には「主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる」と書かれている。これは世の終わりに起こることに関する預言であるが、このことは実際に月が血に変わるのではなく、その色が血のように赤くなるということを表現しているのである。それゆえこの出エジプト記のほうでも、ナイル川の水が血のように赤くなるということを言っているものと思われる。ではなぜ水が血のように赤くなるのか。これにもいろいろな説がある。

①ナイル川の水量の少ない時期に繁茂するある種の赤い藻が異常発生して、その結果ナイル川の水は血のようになり、その中の生物は死ぬ。

②ナイル川の川底に沈殿している細かい粒状の赤土がナイル側の水量が増し加わる時期に掻き立てられて、水が赤くなる。しかもその水に微生物が大量に発生して、それによって魚がみな死んでしまう。

これらはみなエジプトにおいてしばしば見られる災害であるという。それで主はこのような現象を極度の強さをもって起こされたのではないかというのである。しかし、池や食器の中の水も血に変わるというのであるから、やはりこれは超自然的な主のさばきであったと言うほかはないであろう。

[22]「しかし、エジプトの呪法師たちも彼らの秘術を使って同じことをした。それで、ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が言われたとおりであった」

呪法師たちも同じことをしたというが、しかし、よく考えてみるとすでにエジプト中の水が血になっているので、もうこれ以上水を血にする必要はないわけである。それでこれは、すでに血に変わっている水を秘術を使ってあたかも血に変えたように見せるトリックではないかと考えることができる。また仮に本当に水を血のように赤く変えることができたとしても、その逆に血を水に変えることができたとは書かれていないので、この災害は彼らの能力の及ばないものであったことは間違いがない。しかし、それでもファラオは呪法師たちが同じ結果をもたらしたので、心を頑なにしてモーセとアロンの言うことを聞こうとはしなかった。これも主が前もって言われたとおりであった。

[23]「ファラオは身を翻して自分の家に入り、このことにも心を向けなかった」

エジプト人も同じことをできるのだからおまえたちの言うことは聞かないということか。しかし、現実にはエジプト全土は非常に困った状態になっているのである。エジプトの最高責任者たるファラオはその政治的な指導力を発揮すべきであったが、彼は何もしないで自分の王宮に引っ込んでしまったのである。

[24]「全エジプトは水を求めて、ナイル川の周辺を掘った。ナイル川の水が飲めなかったからである」

これは井戸を掘って地下水を得ようとしたのであろう。しかし、はたしてその水はどのような色をしていたのであろうか。

[25]「主がナイル川を打たれてから七日が満ちた」

この間エジプト人たちはどのような思いで日々を過ごしたであろうか。彼らはこんな状態がいつまでも続くと生きてはいけないと非常な危機感を持ったことは間違いないであろう。

ここではイスラエル人の状態が全く述べられていないが、イスラエル人の住むゴシェンの地だけは超自然的に守られて、水が血に変わることなく普通の水が飲めたと考えられる。21節では「エジプト人はナイル川の水を飲めなくなった」と書かれている。この災害はエジプトに対するさばきであるので、イスラエル人は同じさばきに会うことなく主の守りのうちに免れていたと考えられる。（のちに出て来る他の災害でもイスラエル人は守られている）

主なる神は八十歳のモーセと八十三歳のアロンを用いていよいよその大いなる御力をエジプトの上に現わされる。これは長い年月にわたってイスラエル民族をしいたげ、苦しめてきたエジプトに対する主のさばきなのである。そしてそのさばきの最初の災害がナイル川の水が血に変わるという形で下された。にもかかわらず、ファラオは心を頑なにしてモーセとアロンの言うことを聞こうとしない。しかし、主はそのファラオの頑なさをとおして次々とエジプトにさばきを下していくのである。そしてそのようにして、イスラエルの神こそ生ける全知全能の力ある神、主であるということをエジプトははっきりと知らされることになるのである。

私たちの住むこの日本もエジプトに負けず劣らず、頑なで神のことば、福音を受け入れようとはしない。徳川幕府は鎖国までして神のことばを拒み、キリシタン弾圧をした。しかし、主はそんな日本も覚えていてくださり、弱い小さな信仰者たちをとおしてみわざをなそうとしてくださっている。

年齢的にはすでに老人となっていたモーセとアロンが主のことばに従っていった時に、主が彼らをとおして大いなるみわざをなさったように、私たちも弱く無力な存在かもしれないが主のみことばに従っていく時に主ご自身が御力を現してくださり、大いなるみわざをなしてくださるのである。私たちがこの日本の今の時代に信仰者として生かされていることは大きな意味がある。主がこの国にも大いなるみわざをなして多くの人々が救いに導かれることを信じて、心からの謙遜な思いと信仰をもって主のことばに従っていく者となりたい。